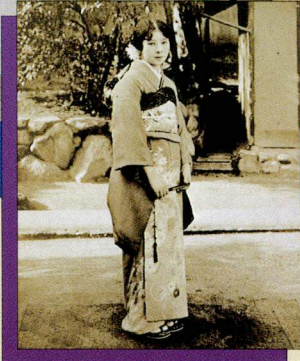


くらしを衣裳で残す



●企画＝水島衣裳雑貨資料研究室 ●制作＝株桜映画社
●16ミリカラー23分 価格＝150,000円 VTR価格＝40,000円

映画完成によせて

かつて、衣服は女性の命であり、財産であった。簞笥、長持何棹が花嫁の評価の一つであった。花嫁は一生着るだけの衣裳を調えたものだった。それだけ衣服には執着があった。一シーズン着れば、解いて、洗って、仕立なおして大事にされてきた。肌を通して、お祖母様や母様に近づくことも出来た。きものは親しい人の魂にふれる寄るべであった。

物であって、物でないきもののもつ古代からの霊性を思いおこさせる、これは今までにない視点からの珍しい映像である。

それはまた、明治・大正・昭和と激動の時代を生きた女性の、きものを通しての歴史でもある。

共立女子大学教授 北村哲郎

●解説

文化庁、東京都など各官庁の学芸員の方々、ならびに、文化着物の権威北村哲郎先生、人間国宝染色家小宮康孝先生のご協力をえての制作作品「くらしを衣裳で残す——水島家の明治・大正・昭和——」

—シナリオプロローグより—

- 六本木の町の喧騒、今風のしゃれたファッションで行き交う若者たち。
その人群れを背景にカメラをP・Uする。
そしてあるマンションの窓へZ・U。
- マンションの一室
様々に積み上げられた衣裳箱の山。
ルーペで衣裳の細部を見ている北村先生と小宮先生の姿がある。
N：あるマンションの部屋部屋に、膨大な衣裳が集められている。これらは、明治、大正、昭和を生きたひとりの女性の遺品である。
衣裳だけでなく、様々な生活用品がほぼ完璧に近い形で残されていて、比較的近い時代の貴重な資料となっている。
- 同 二人の先生の作業を手伝っている久実さんと佳世さんの姉妹がいる。
N：この遺品を残したのは、この二人の女性の母である。ふたりは母の生前これほど膨大な遺品があるとは知らされていず、整理を始めてみてその量のおおさにしばらく呆然とし、またその魅力に取りつかれて行った。
衣裳の専門家の北村先生と小宮先生の助言を得ながら、当時の庶民の衣生活の一端をたどってみよう。

[千代さんのこと]

映画の主人公「水島千代」は大阪・船場を心の故郷に、昭和11年、東京にて、結婚。以来、東京を住处とし、昭和61年、75歳の生涯を暮じた実在の女性。

千代は一人娘であった。その母阿以も一人娘で、そして、祖母琴もまた養女であるが一人娘であった、三代の女系家族——。明治・大正・昭和の「衣裳&雑貨」の数々が遣った。衣裳だけでなく生活用品の山であった。女の絆ゆえなせる業なのか……。

それらを受け継ぎ、整理する千代の娘、久実・佳世姉妹。

映画は、「衣裳」にスポットライトをあて、千代結婚 昭和11年でジ・エンドいたします。姉、小島久実の協力の中、正田佳世作「水島家の御衣裳」を基に、映画化された次第です。二人の姉妹は、これら膨大な母の遣した品々を博物館に寄贈寄託して、より多くの人々の参考に供したいと願っております。



●協力

共立女子大学教授＝北村哲郎
重要無形文化財保持者＝小宮康孝
劇作家・「船場を語る会」会員＝香村菊雄

資料整理・総合進行＝林千恵子

●スタッフ

製作＝村山和雄
福間順子
脚本＝大島善助
福間順子
演出＝大島善助
原村政樹
撮影＝村山和雄
木村光男
照明＝水村富男
音楽＝角田 敦
録音＝朝日スタジオ
解説＝杉田郁子

原案＝「水島家の御衣裳」正田佳世

●製作

株式会社 桜映画社 〒151 東京都渋谷区代々木1-57-1 代々木センタービル6階
TEL 03(3320)6311 FAX 03(3320)7666